

タイ語文献について (2)

— Phraracha Phongsawadan Krung Kao —

石 井 米 雄

1. 本稿はアユタヤ史の基礎史料中《*Phraracha Phongsawadan Krung Kao*》(アユタヤ王朝年代記)と称されるものを取上げ、今日入手可能な7種の刊本の各々につき簡単な解説を加え、これらの「年代記」を利用しようとする研究者の便に供することを目的とするものである。

2. 1. 今日までに発見された諸写本の比較研究の結果、「アユタヤ王朝年代記」(以下誤解を生じないかぎり「年代記」と略称する)には、《*chabap yq*》(略述本)と、《*chabap phit-sadan*》(詳述本)の2種が存在していたことが知られている¹⁾。

2. 「略述本」は航海日誌などに比較されることもあるように²⁾、生起した事件の簡単な叙述と、場合によりこれに簡略な説明を加えた編年体の年代記である。

参考までに「略述本」の一部を以下に訳出しておく。

◎小歴686年子年, *Phraçhao Phanaeng Choeng* 大仏の建立を始めた。

◎小歴833年卯年, 白象を捕えた。

◎小歴852年戌年, *Mūang Phichai* の城壁の造築をはじめた。

一方「詳述本」は、同じく編年体の体裁をとってはいるが、前者にくらべ叙述ははるかに詳密である。G. Coedès は「詳述本」に《*Chroniques*》の名を与えている³⁾。

3. 「略述本」の原本は小歴1042年(1680年)ナライ王(*Somdet Phra Narai Maharat*, 1657~1688)の命により編纂されたもので、今日《*Luang Prasoet*》本および《トンブリー王室本》の二種の残簡本により伝えられている。「詳述本」が1350年のアユタヤ莫都に筆を起しているのに対し「略述本」は、さらに26年を溯って小歴686年(1324年)の大仏建立に触れている点が注目される。現存の写本では小歴966年辰年(1604年)までの叙述しかないので、おそらくこれに続く第2巻を有していたと推定される原本がどこまでの叙述を行なっていたかは不明である。

1) 《*chabap yq*》は le type bref (*Schweisguth*), le type concis (*Coedès*) などと訳され、《*chabap pit-sadan*》(<*vistāra*) は le type détaillé (*Schweisguth*), le type développé (*Coedès*) と訳されている。

2) P. *Schweisguth*, *Etude sur la littérature siamoise*. Paris, 1951. p. 107.

3) G. *Coedès*, "Une recension palée des Annales d'Ayuthya". *BEFEO*, 14. p. 1.

4. 「詳述本」の原本は《小歴1136年本》と呼ばれる残簡本によってわずかにその原型をうかがうことが出来るに止まる。《小歴1136年本》は、いわゆる《Banphanaek》と呼ばれる序の部分欠缺ので、原本の編纂の由来および成立の年代を推定する手がかりがないが、ダムロン親王 (Krom Phraya Damrong Rachanuphap) は残簡本の文体を比較研究した結果、本書の成立につき、ボロマコート王 (Somdet Phra Ćhao Boromakot, 1733~1758) の勅令により編纂されたものであろうとの推定を下している⁴⁾。

3. 上にのべた「年代記」の原本および写本は、1767年のビルマ軍によるアユタヤ攻撃の際ほとんども散逸してしまったものと思われる。

トンブリー王朝 (1767~1782) に入ってからこれらの散逸した「年代記」の収集に努力が払われた。「略述本」については「トンブリー王室本」 (Chabap Luang khong Phra Ćhao Krung Thonburi) が1912年に発見されており、また「詳述本」については同じく「王室本」すなわち「小歴1136年本」の一部が発見されていることはトンブリー時代に「年代記」復旧の事業が行なわれていたことを証拠立てるものであるといえよう。しかしトンブリー時代にこれらの「年代記」の校訂事業がどの程度行なわれたかについては今後の研究にまたねばならないが、少なくとも「略述本」に関するかぎり、「Luang Prasoen 本」と「トンブリー王室本」の2本がほとんど完全に一致するところから校訂事業は行なわれなかったのではないかとの見方が行なわれている。「詳述本」についても古写本の再構にとどまり、実質的な加筆訂正はほとんど行なわれなかったものと考えられている⁵⁾。

4.1. ラタナコーシン朝 (1782~) に入るとまず初代のラーマ1世王 Somdet Phraphuttha Yotfa Ćhulalok (1782~1809) の時、勅命による「詳述本」の校訂⁶⁾が行なわれている。校訂者は Prince Māhēsuen Inthāramēt⁷⁾, 校訂本の成立は小歴1157年 (1795年) とされており、《PhanĀchanthanutamat 本》22巻として今日に伝えられている。

2. その後ラーマ3世の治世においてパラマヌチット親王 (Somdet Phra Paramanuchit Chinorot, 1790~1853), による「年代記」の校訂が行なわれた。校訂本は「Somdet Phra Paramanuchit 本」と呼ばれ、後に米人宣教師ブラドレー博士 (D. B. Bradley) が、ラーマ4世モンクット王の援助を得て印刷出版した。出版者の名を冠して「ブラドレー博士本 (Chabap Mq Bratle)」と呼ばれているが、二冊本として刊行されたので「二冊本 (Chabap Phim Sog Lem)」

4) Krom Phraya Damrong Rachanuphap, *Kham Nam, Prachum Phongsawadan Phak thi 4*. Bangkok, B. E. 2458 (1915/16). iii.

5) *ibid.*, iv~v.

6) 年代記の著述に関し2種の用語法を区別する必要がある。そのひとつは《taeng》で、伝承の諸史料を材料として新たに歴史記述を行なうこと。もうひとつは《chamra》で、これは《校訂》(*bearbeiten: Wenk*)を意味する。

7) この prince の名は Coedès, Petithuguenin の両学者によってあげられているが、筆者はこれをタイ語文献で確認出来なかった。名前の翻字は Coedès それにしたがった。(Coedès, *op. cit.*, p. 2; P. Petithuguenin, "Notes critiques pour servir à l'histoire du Siam" *BEFEO* 16. 1916. p. 5)

という名も広く知られている。本校訂本の校訂者およびその成立の時期については最近タイ人の学者から異説が出されているが、これについては後述する。(p. 21f. 参照)

3. ラーマ4世、モンクット王 (Somdet Phra Chom Klau, 1851~1868) は Krom Luang Wongsathiratsanit に命じて「年代記」詳述本の校訂を行なわしめたが、後自らこれに朱を加え、ここにいわゆる「御親筆本 (Chabap Phraracha Hatthalekha)」が成立した。

以上が「アユタヤ王朝年代記」の成立史の概要である。これらの諸本はその大半がすでに印刷出版されている。初版はいずれもいわゆる Nangsū Čhaek⁸⁾ として上梓されたものであって入手はやや困難であるが、なかには一般の市販本として既に版を重ね、入手の容易なものもある。以下「年代記」の刊本のそれぞれにつき逐一説明を加えて行くこととしたい。

5. 《Phraracha Phongsawadan Krung Kao Chabap Luang Prasoet Aksonnit》(ルアング・プラサート本)。初版：仏歴2450年(1907/8)。改訂版：仏歴2457年(1914/15) その後各種の版あり。本書はチュラロンコン王 (Somdet Čhunla Čhom Klau, 1868~1910) の廷臣 Luang Prasoet Aksonnit のちの Phra Pariyatthammathada (Phae Parien) が某民家で発見した写本を1907年6月19日ワチラヤン文庫(のちの国立図書館)に寄贈したもので、今日発見者の名を冠して《Chabap Luang Prasoet Aksonnit》または簡単に《Chabap Luang Prasoet》(ルアング・プラサート本)と呼びならわされている⁹⁾。発見された写本は黒色の紙に黄文字で筆写されたいわゆる Samut Dam で、書体から推定してアユタヤ末期乃至ラタナコーシン初期の写本であるとされている。ルアング・プラサート本は雨にあたり文字の消失した個所が多いのが難とされていたが、1912年さらに同一の内容をもつ1774年の写本《Chabap khong Phra Čhao Krung Thonburi》(トンブリー王室本)を得て前者の不備の個所を補い新たに校訂本が作成され2年後の1914年、「タイ史料集成 (Prachum Phongsawadan) の第1巻に収録されて出版された。

本書は上述した「略述本」の代表とされるもので、記述はきわめて簡潔であるが、現存する「年代記」中最古層に属するものであること、記載する年代の正確なること等をもってアユタヤ史料中最重要文献の一に数えられている。本書の発見によって、それまで孤立していたタイ史がようやく近隣諸国史と結合するに至ったといわれている。(Wood)

Banphanaek (序文) の叙述よりして、原本の成立は小歴1042年(1680)、Somdet Phra Narai Maharat の勅命により編纂されたものと考えられる。

本文は小歴686年(1324年)のPhanaeng Choen 大仏の建立に筆をおこし、アユタヤ奠都を経て小歴966年(1604年)までの出来事を年代順に簡潔に叙述しているが、原本はおそらく2

8) Nangsū Čhaek については、拙稿：「タイ語文献について(1)」『東南アジア研究』第4号、1964、pp. 2~12 参照。

9) 1907年写本の発見と年を同じうして初版が上梓された。

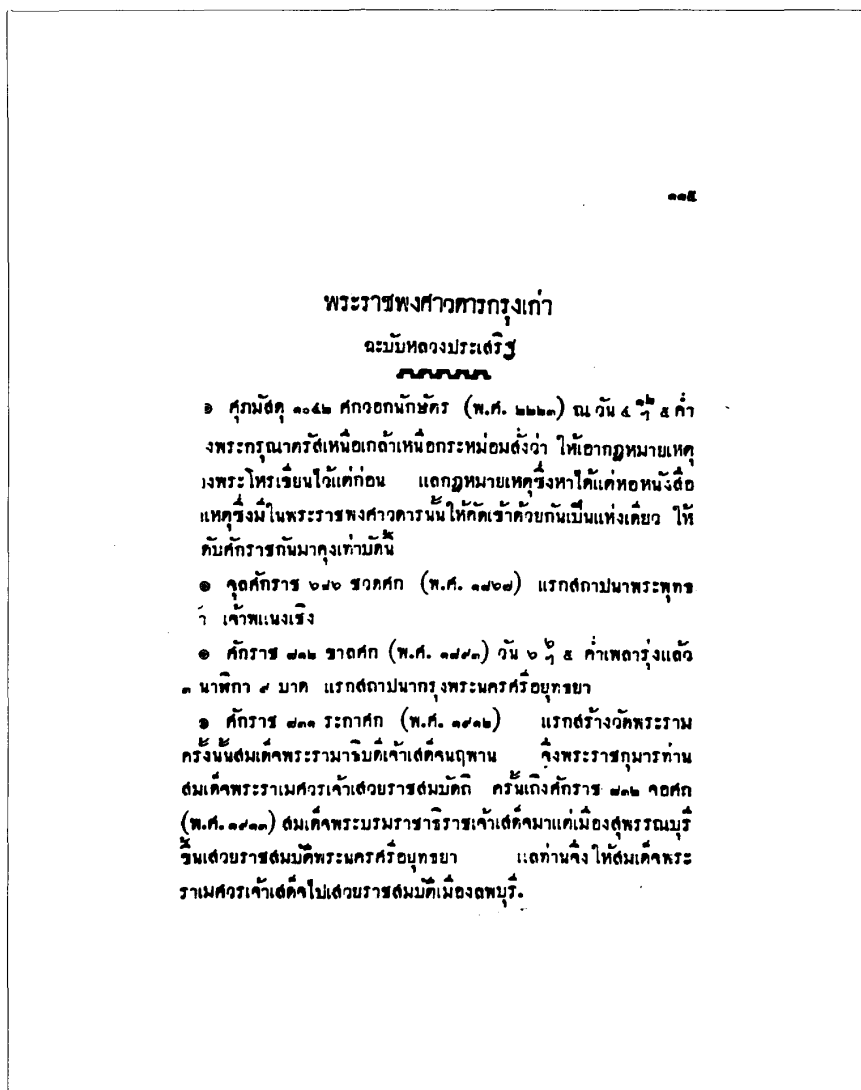
冊本で、本写本を第1巻としこれにつづく第2巻があったものと推定されている。

Otto Frankfurter による英訳 “Events in Ayuddhya from Chulasakaraj 686-966” (JSS Vol. VI, pt. 3. 1909) があるがこの英訳の利用には W. A. R. Wood による批判的解説 “The Pongsawadan of Luang Prasöt” (JSS XIX, pt. 3, 1925) を併読することがのぞましい。

刊本としては次のいずれかが入手に便利である。

- (1) *Prachum Phongsawadan Phak thi* 1. B. E. 2457 (1914) 以後何回か Nangsū Čhaek として刊行されている。(バンコック在住者であれば王宮前広場 (Sanam Luang) の街頭古書店で簡単に入手できよう。)
- (2) *Kham Hai Kan Chao Krung Kao, Kham Hai Kan Khun Luang Ha Wat lae Phraracha Phongsawadan Kao Chabap Luang Prasot Aksonnit. Khlang Witthaya*

(「ルアング・プラサート本の刊本の一部」)



พระราชพงษาวดาร ความเก่า
ตามต้นฉบับหลวง เวียนครั้งกรุงธนบุรี เมื่อจุลศักราช ๑๑๓๖

● ในขณะพระแก้วฟ้า พระราชบุตรพระเจ้าช้างเผือกปราชญ์ทอง
เจดีย์ให้ ไปถวายแก่พระยาธำรงช้างนั้น ครั้นพระแก้วฟ้าราชบุตรไป
ถึงเมืองธำรงช้าง พระยาธำรงช้างก็ว่าเราจำเพาะให้ ให้ ไปขอพระเทพ
กระบี่กระบี่ แต่พระแก้วฟ้าราชบุตรนั้นเราไม่ได้ ให้ ไปขอ แต่เราจะส่ง
พระแก้วฟ้าราชบุตรคืนไปยังพระนครศรีอยุธยา และขอพระเทพ
กระบี่กระบี่จำเพาะแต่ก่อนนั้น ครั้นเสร็จการก็ช้างเผือก พระยา
ธำรงช้างก็แจ้งพระยาธำรง ๑ พระยาธน ๑ พระยาพิฆเนศวร ๑ ให้มา
แจ้งพระแก้วฟ้าราชบุตร แต่พระยาธำรงช้างให้แจ้งราชสำนักมาถวาย ว่า
จะขอพระเทพกระบี่กระบี่ พระเจ้าช้างเผือกก็ตรัสบัญชาตาม จึงตก
แจ้งการที่จะส่งพระเทพกระบี่กระบี่ไปแก่พระยาธำรงช้าง

● ครั้นถึงเดือนห้าจุลศักราช ๑๑๓๖ พระเจ้าช้างเผือกตรัสให้
พระยาธำรงไปส่งพระราชธิดาไปแก่พระยาธำรงช้างธำรงนั้น ส่งไปโดย
ทางธำรงช้าง

● ขณะนั้นเจ้าฟ้าไปถึงพระเจ้าหงษา ๗ ก็แจ้งพระกระษัตริย์นายกอง
ยกพล ๕๐๐๐ รุกมาชุมนุมอยู่ในตำบลมะรุเวงนอกกำแพงพระนคร เดชะกั

(「小歴1136年本」の刊本の一部)

Press, Bangkok, 1964. 472pp.

6. «*Phraracha Phongsawadan Khwam Kao Chabap Chunlasakarāt 1136*» (小歴1136年本)。Prachum Phongsawadan Phak thi 4. Bangkok, 仏歴2458年 (1915/16) pp. 1~20.

1911年 Čhao Phraya Nararatanarachamanit の子 Nai Sathien Raksa (Kong Kaeo) がワチラヤン文庫に寄贈した小歴1136年 (1774年) 本は、諸本との比較研究の結果、その文体からアユタヤ時代に編纂された「年代記」詳述本のトンブリー時代の写本の残簡であると推定された。第3巻ただ1巻を得たのみであるためこれをもって失われた原本の全貌をうかがうことは困難であるが、ダムロン親王は本書を、アユタヤ後期において文筆大いに盛え数多くの文芸作品を後世に遺したボロマコート (Somdet Phra Boromakot, 1733~1759) 王時代に成立したものと推定している。

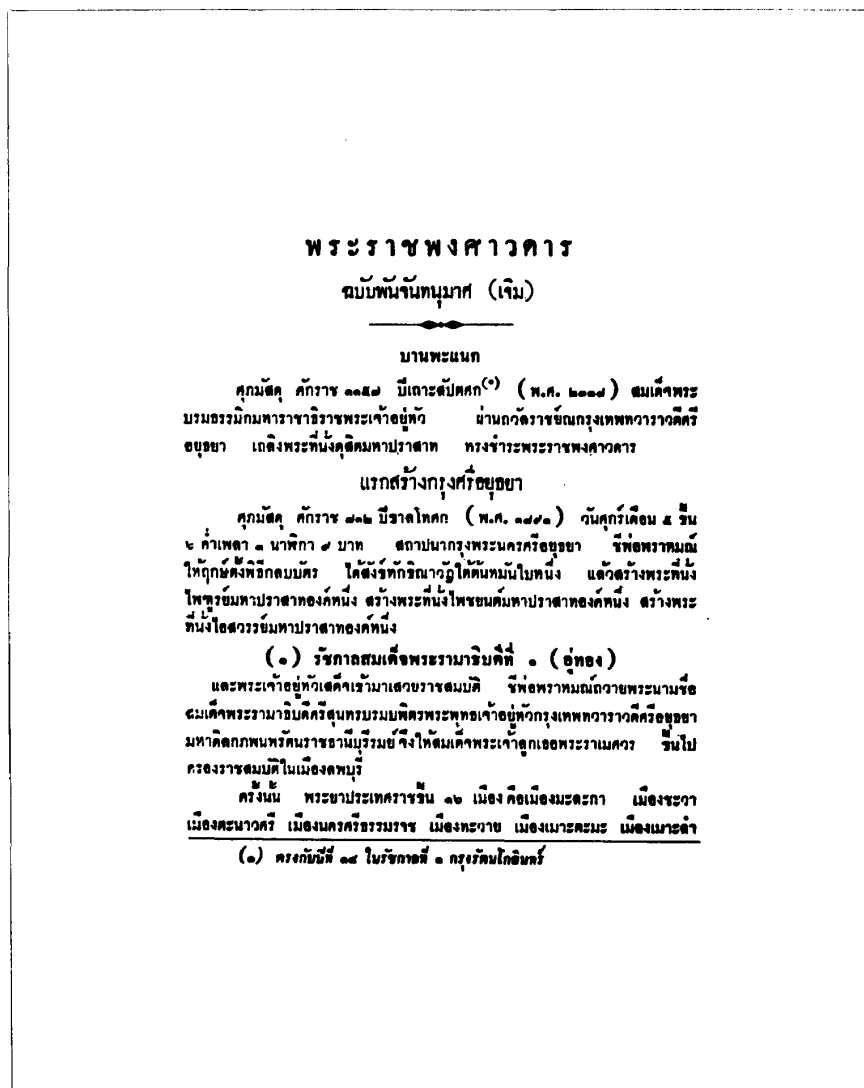
発見された写本の文体はさきの《Luang Prasoen 本》にも匹敵する程 archaic であるが、叙述は略述本よりもはるかに詳細で、「詳述本」の原型をほうふつさせるに足る内容をもっている。現存の第3巻はマハー・チャクラパット王 (Somdet Phra Maha Čakraphat, 1549~1569) の治世の末期の叙述が主たる内容をなす。

仏歴2458 (1915/16) 年に「タイ史料集成」第4巻に集録され Nangsü Čhaek として上木されて以来発行されていない模様で、「タイ史料集成」全77巻の中でも入手しにくい部類に属している。市販本として印刷されたことがないので利用者は上記の「史料集成」第4巻について見る以外今のところ方法はない。

7. 《Phraracha Phongsawadan Chabap Chunlasakarāt 1145》(小歴1145年本)。未刊。

小歴1145年 (1783) すなわちラタナコーシン朝のごく初期の写本の一部が今日国立図書館に

(「バンチャンタヌマート本」の刊本の一部)



พระราชพงศาวดารพิสดาร

ตั้งแต่พระเจ้าอู่ทองสร้างกรุงศรีอยุธยา

ศุภมัตตศักราช ๑๑๒ ปีชวด โทศก วันศุกร์เดือนห้า
ขึ้นหกค่ำ เพลาสามนาฬิกาเก้ายาฬ สถาปนากรุงพระมหานคร
ศรีอยุธยา ขั้วพ่อพรหมณ์ให้ฤกษ์ตั้งพิธีกลบปาก, ได้สังฆ-
ทักษิณวัตรได้ดินทมน้ำขอมหนึ่ง แลสร้างพระที่นั่งไพศุขยัมหา-
ปราสาทองค์หนึ่ง, สร้างพระที่นั่งไพศุขยัมคัมหาปราสาทองค์
หนึ่ง, สร้างพระที่นั่งไอศวรรยัมหาปราสาทองค์หนึ่ง, แล
พระเจ้าอู่ทองเสด็จเข้ามาครองราชสมบัติ. ขั้วพ่อพรหมณ์
ถวายพระนามว่า สมเด็จพระรามธิบดีศรีสุนทรบรมบพิตรพระ-
พุทธเจ้าอยู่หัว, กรุงเทพทวารวดีศรีอยุธยามหาดิลกภพนพ-
รัตน์ราชธานีบรมมัย, จึงให้สมเด็จพระเจ้าลูกเธอพระราเมศวร
ขึ้นไปครองราชสมบัติในเมืองลพบุรี. ครั้นนั้น พระยาประเทศ-
ราชขึ้น ๑๖ เมือง คือ เมืองมณฑา, เมืองขว, เมืองคณาหว, เมือง

(「2冊本」の刊本の一部)

所蔵されている。発見された写本は2巻で、1巻は Somdet Phra Maha Čhakkraphat (1549～1569) の治世を、また他の1巻は Somdet Phra Maha Thammaracha (1569～1590) を扱っているといわれるが未公刊であるため詳細は不明である。

8. 《Phongsawadan Krung Si Ayutthaya Chabap Phan Chanthanumat (Choem)》(パンチャンタヌマート本)。

Prachum Phongsawadan Phak thi 64 Bangkok, 仏歴 2479 (1936/7) 初版。仏歴 2503 (1960) の版の pp. 1～313 (ただし Krung Kao の部分のみ)

これはラーマ一世の命により 1795 年作成された「年代記」詳述本の校訂本である。Phan Chanthanumat なる人物と本書との関係は審かでない。Coedès によれば校訂者は Prince Māhésuén Inthāramèt であるというが、刊本のテキストの冒頭の Banphanaek にも校訂者の

名は示されておらず、典拠は不明である。先学の御教示を乞う次第である。

22巻の写本として発見されたものであるが完本ではなく途中に不備の巻を含む。内容は小歴712年(1350)のアユタヤ奠都に始まり、仏歴2321(1778)年すなわちトンブリー王朝の末期までの出来事を詳述したものである。

本書はアユタヤ朝の部分と、トンブリー朝の2部に分けて、「タイ史料集成」の第64巻および第65巻として上梓されたほかには、市販本として未だ刊行されていない。かなり大部(2部あわせて460頁余)であることもあってか、しばらく Nangsū Čhaek としても出版されることがなく利用者は不便を感じていたが、1960年に全く別人の葬儀の引出物として、それぞれ第64巻、第65巻が印刷頒布され入手が容易になった。前記の Sanam Luang で簡単に入手できよう。

(「プラチャクラパディポン本」の刊本の一部)

พระราชพงศาวดารกรุงศรีอยุธยา

ฉบับพระจักรพรรดิพงศ์ (จาก)

ศักราช ๗๑๒ ปีชวด ไทยศก วันศุกร์ ขึ้น ๖ ค่ำ เดือน ๔
เพลา ๓ นาฬิกา ๔ ยาก สถาปนากรุงพระนครศรีอยุธยา^(๑) ขึ้น
พระมหามณเฑียรที่วัดอัมพวัน ใต้สังขตักขินาวรรคใต้ต้นหมันโยหนึ่ง
แล้วสร้างพระที่นั่งไพฑูริย์มหาปราสาทองค์หนึ่ง สร้างพระที่นั่งไพฑูริย์^(๒)
มหาปราสาทองค์หนึ่ง สร้างพระที่นั่งไอศวรรย์มหาปราสาทองค์หนึ่งแล้ว

(๑) รัชกาลสมเด็จพระรามาธิบดีที่ ๑

พระเจ้าอู่ทองเสด็จเข้ามาเสวยราชสมบัติ^(๓) ขึ้นพระมหามณเฑียร
พระนามขึ้นสมเด็จพระรามาธิบดีศรีสุนทรบรมยพิทพรพริ้งเจ้าอยู่หัว
กรุงเทพทวารวดีศรีอยุธยามหาจักรพรรดิพุทธเจ้าอยู่หัว
สมเด็จพระเจ้าอู่ทอง พระราชมารดาขึ้นไปครองราชสมบัติในเมืองลพบุรี
ครั้งนั้นพระยาประเทศราชขึ้น ๑๖ เมือง คือ เมืองมะละกา เมือง
ชวา เมืองตะนาวศรี เมืองนครศรีธรรมราช เมืองทวาย เมืองมะละแหมะ
เมืองมะละเต็ง เมืองสงขลา เมืองจันทร์บุรี เมืองพิษณุโลก เมือง

(๑) ฉบับกรมตำรวจ ระบุเพชรมณเฑียร

(๒) ฉบับพระราชพงศาวดาร, ฉบับพันจันทนุมาศ, ฉบับกรมตำรวจ พระที่นั่งไพฑูริย์
มหาปราสาท

(๓) ฉบับพระราชพงศาวดาร มีข้อความละเอียดออกไป เช่นกล่าวว่า พระชนมโอรส
๑๑ พระพรรษา แล้วไประลึกลูกหลวงหลวงจึงเป็นพี่พระมเหสี ไปครองราชสมบัติ
ในเมืองลพบุรี

พระราชพงศาวดาร
ฉบับพระราชหัตถเลขา
เล่ม ๑ ตอน ๑
แผ่นดินสมเด็จพระรามาธิบดีที่ ๑

ศกมัตถัศักราช ๘๓๒ ปีระาโทศก (พ.ศ. ๑๘๘๓)
วันศุกรวัน ๖ ค่ำ เดือน ๕ เพ็ญตามนาฬิกาเข้าบาท สถาปนา
กรุงพระนครศรีอยุธยา รัชพ่อพรหมณ์ให้ฤกษ์ตั้งพิธีถอบ
บาตร ได้ตั้งรัชกรินาวัฏไค้ค้นหมันใบหนึ่ง แล้วสร้าง
พระที่นั่งไพฑูรย์มหาปราสาทองค์หนึ่ง สร้างพระที่นั่ง
ไพฑูรย์มหาปราสาทองค์หนึ่ง สร้างพระที่นั่งไอศวรรย์
มหาปราสาทองค์หนึ่ง แล้วพระเจ้าอู่ทองเสด็จเข้ามาด้วย
ราชสมบัติ พระชนม์ได้ ๓๘ พระพรรษา รัชพ่อพรหมณ์
ถวายพระนามว่า สมเด็จพระรามาธิบดี ศรีสุนทรบรมพิตร
พระพุทธเจ้าอยู่หัว กรุงเทพมหานครนครมวรทวารวดีศรี

(「御親筆本」の刊本の一部)

9. «*Phraracha Phongsawadan Chabap Phim Song Lem*» (2冊本)。Vol. 1, 1863. 336 pp. Vol. 2 1864, 406 pp.

ラーマ三世王が Krom Phra Paramanuchit Chinorot に命じて作成したといわれる詳述本の校訂本。1865年に米人宣教師ブラドレー博士がモンクット王の援助を得て印刷に付し、それぞれ1863年及び1864年に発行された。

本書は「詳述本」の部類に属する。本文の内容は1350年のアユタヤ奠都から始まり、ラタナコーシン時代初期すなわち小歴1154年（1792）までで終わっている。

上述のとおり、本書はパラマヌチット親王の校訂によるものであると長らく信じられて来たが、最近タイ人の学者でこれに疑義をさし狭む向きがあらわれている。すなわち1962年に刊行された本書の市販本に寄せた「芸術局」の序文は明瞭に Krom Phra Paramanuchit を本書の

校訂者として否定し、同親王の師 Phra Chetphon 寺院の Phra Phanarat 僧正こそ校訂者であると断じ、書名として《Chabap Somdet Phra Phanarat Wat Phra Chetphon》(チエートボン寺パナラット僧正本)なる新しい名を用いることを提唱している。

「2冊本」は古書としても希覯本の部類に属し入手し難いが、アユタヤ朝の部分のみを印刷した市販本(上述のもの)が現われ利用が便利になった。(Phraracha Phongsawadan Krung Si Ayutthaya Chabap Somdet Phra Phanarat Wat Phra Chetphon. Khlang Witthaya Press: Bangkok, 1962. 655 pp.)

10. 《Phraracha Phongsawadan Krung Kao Chabap Phra Chakraphadiphong》(Chat)
(プラチャクラパディボン本) Bangkok, 仏歴2502. 398 pp.

原本は「貝多羅葉」17束 (phuk). 1908 年 Nai Čhit が父 Phra Čhakraphadiphong の記念

(「大英博物館本」の刊本の一部)

พระราชพงศาวดารกรุงสยาม

วันที่ ๔ ๖ ๗ ค่ำ อุดมการาช ๑๑๖๘ ปีเดชะ
เทพดาล เพลาเช้าเสด็จออก ณ พระที่นั่งจักรพรรดิพิมาน
ขึ้นเสด็จฯ ครั้นพระราชวังบวรฯ พูลเกล้าถวาย เล่ม ๑
และในเรื่องราวเดิมเหตุนี้ ยังมีคาบศทั้งสอง
มือพระสันตปาณ และเจ้าอาวาสที่มีมณฑลพื้นองอาจอันได้
๑๐๐ ปี แต่พระชินศรียังเป็นพระยาปราบเท่าใดครั้น และ
พรหมณ์ทั้ง ๑๐๐ บ้านยอมเป็นอุกทธาน พระยาพิชัยสอง
จึงสั่งสอนว่าสุทนต์ทลาย อย่าประมาท จงช่วยกันทำกำหนด
กันตัว อย่าเมาเมวแก่คณหา ตาควาเร่งทุกแห่งไว้ อันพงศ
พรหมณ์สืบไปในภายหลัง จะเป็นกระหัดจะคักถูกเกล้า
เกล้าฯ ห่ออย่าเมาเมวทุกคณด จะละคำทพดเฮาแต่
โองะ โทสะ โมทะ มักได้ให้ท่านฉิบหาย อนึ่งท่าน

としてワチラヤン文庫に寄贈したものである。一見前述の「2冊本」と同一の内容をもつかに見えるが、ナライ王の治世の部分は「2冊本」と全く趣を異にし、別途に筆を起こしたものと推定される。かつてこの部分のみを取出し「タイ史料集成」第8巻に集録刊行されたことがあるが (*Prachum Phongsawadan Phak thi* 8. Bangkok, 仏歴2460 (1917)。pp. 67~85) 最近に至り Nangsū Čhaek として完本が出版された。 (*Phraracha Phongawadan Krung Si Ayutthaya Chabap Phra Chakraphadiphong (Chat)*. 仏歴 2502 (1959)。398pp.) この新版ではその後の比較研究の結果従来漠然と「2冊本」と同一と信じられていた部分にもわずかながら異同があることを発見したとし、これをすべて脚注で指摘しており対照に便利である。小歴 712 年寅第 2 年 (1350) から小歴1089年未第 4 年 (1727) に及んでいる。

11. 《*Phraracha Phongawadan Chabap Phraracha Hatthalekha*》初版: 仏歴2455年(1912)。

ラーマ4世モンクット王は1855年 Krom Luang Wongsathiratisanit に命じて「年代記」諸本の比較校合を行なわしめ、その結果出来上った校訂本に王自ら筆を加えた。かくして成立した校訂本が世にいう「御親筆本」である。仏歴2455年 (1912) Somdet Čhao Fa Krom Phraya Phanuphanthuwong Woradet によりはじめて3冊本として刊行された。「御親筆本」の原本は国立図書館に22冊を所蔵するのみであったが、御親筆本と同一の内容をもつ写本「Krom Luang Mahisawarin 本」42巻が完全な形で発見されている。1350年のアユタヤ奠都から始まって小歴1152年 (1790年) をもって巻をとじている。仏歴2457年以降上梓された刊本には巻頭にダムロン親王の論文2篇が収録されている。第1の論文は “Tamnan Nangsū Phraracha Phongsawadan” (史籍解題) で、タイ史の研究者の徴すべき文献をとりあげ、批判的解説を加えており、タイ史の研究を志す者の第一に読むべき論文といえよう。O. Frankfurter による英訳がある。第2の論文は “Athibai Hetkan mūa kṇ Sang krung Si Ayutthaya” (アユタヤ前史) である。(以上いずれも JSS に掲載されたものであるが、ダムロン親王の100年記念祭に際し発行された「英語論文集」にまとめて収録されている。(*Prince Damrong, Miscellaneous Articles*. Bangkok, 1962. 124+XXXIII))

12. 《*Phraracha Phongsawadan Krung Sayamčhak Ton Chabap thi pen Sombat khong Britit Miusiam Krung London*》(「大英博物館本」又は「J. H. Hayes 本」) Bangkok; Kau Na Press 仏歴2507年 (1964)。iv+743.

1958年タイ史に関する文献渉猟のため欧米を旅行中のタイの歴史学者 Nai Khačḥon Sukha-phanit (Nai Kachorn Sukhabanij) は大英博物館において洋綴のタイ語写本30巻を発見した。この写本は1948年5月31日 J. Hurst Hayes Esq. なる人物が同博物館に寄贈した写本であった。Nai Khačḥon は直ちにこれらの写本をマイクロフィルムに納めてバンコックへ送った。「芸術局」においてこれを検討したところタイ史研究のための有益な資料であることが判明し、1964年2月、この全巻がバンコックの “Kau Na Press” から発行されることとなった。

本書の内容についてみるに、まず冒頭の部分に *Phongsawadan Nua* を想起させる叙述があるが、アユタヤ奠都以後の叙述は「2冊本」と軌を一にした内容である。1784年、ラーマ1世の治世第3年で攔筆している。

発見されたこの写本は洋綴であるが、途中各所に「第何巻了」の文字が挿入されている点からみると、これらは何らかの Samut Thai (タイ式の横型折本) から筆写したものであらうと想像される。

本写本のひとつの特徴とされる点は、年・月・日等の文字のみ書かれていて、数字を入れるべき空白がそのまま残されている点である。これはおそらく「年代記」の校訂に際し、日付の検討を行ない確実な数字を得ぬまま放置されたものと推定される。

今回出版された刊本は、「2冊本」および「パンチャンタヌマート本」と異なる場合にはその異本の文言を脚注に加えてあり便利である。

参 考 文 献

1. Krom Phraya Damrong Rachanuphap, "Tamnan Nangsū Phraracha Phongsawadan", *Phraracha Phongsawadan chabap Phraracha Hatthalekha. Vol. 1, pt. 1*. Bangkok, 1952. pp. 1~50. (英訳: "The story of the records of Siamese history" *The Siam Society Fiftieth Anniversary Commemorative Publication. Vol. 1. 1904-29*. Bangkok, 1954. pp. 79~98.
2. P. Petithuguenin, "Notes critiques pour servir à l'histoire du Siam". *BEFEO* 16, 1916
3. Klaus Wenk, "Prächum Phongsāwadān, Ein Beitrag zur Bibliographie der thailändischen historischen Quellen" *Oriens Extremus*. 1962, pt. 2. pp. 232~257.
4. P. Schweisguth, *Etude sur la littérature siamoise*. Paris. 1951. 409p.
5. W. A. R. Wood, *A history of Siam*. London. 1926. (repr. Bangkok. 1959) 300p.
6. George Coedès, "Une recension pâlée des d'Ayuthya" *BEFEO*. 14, 1914. pp. 1-31.